座談会

高槻キャンパスの開設

―総合情報学部の経緯―

日時
平成八年十二月二十一日（土）
午後三時～午後五時三十分

場所
関西大学一〇〇周年記念会館
特別第一会議室

出席者
学長　石川　啓
常務理事　森本靖一郎
総合情報学部教授（初代学部長）　高木　教典
総合情報学部教授（初代学部長代理）　井上　宏

司会
年史編纂委員会委員長　薗田　香融
年史編纂委員会副委員長　神堀　忍

オブザーバー
企画室長　北村　博
財務局長　石原　壯
財務局次長　林　邦生
財務課長　川上　孝雄
管財局付担当課長　阪口　辰夫
施設課長　三宅　邦弥
事業局長　増地　英一
大学事務局次長　石山　博康
高槻キャンパス事務局長　岩村　護
総合情報学部事務長　濱口　仁一
総合情報学部事務室主任　池田　繁之
高槻キャンパス事務長　井河　俊一
高槻キャンパス事務室主任　加藤　勝

事務局
出版部出版課（年史資料編集室）

最後まで候補に残った高槻・霊仙寺地区と猪名川・肝川地区

薗田　高槻キャンパスができ、二年前の平成六年に総合情報学部が無事スタートいたしました。本日の座談会は、高槻キャンパスの開設と総合情報学部の発足に直接タッチされたり、折衝にあたられた先生方にお集まりいただき、校地開発の経緯や教学体制と施設設備の整備経過、文部省との折衝、それから現在の教学体制、その他苦心談などについてお話を伺いたいと思います。

まず、校地開発の経緯から入りたいと思いますが、昭和五十一年ごろから関西大学の学生の定員が大変増加し、それに伴って校地面積が不足するということが問題になってまいりました。記録によりますと、昭和五十四年の一月、文部省の視学委員の視察で校地の不足を指摘されたようです。そこで、いよいよ不足する校地を何とか取得しなければならないということになりまして、具体的な動きが始まったように聞いております。そのあたりのいきさつをよくご存知の森本常務理事にお伺いしたいと思います。

森本　校地不足については、とにかく三万五千坪足りないので、ぜひ土地を購入しなければならないということになり、当時、久井忠雄理事長が大変苦慮されまして、あちらこちらにその話の打診をされました。その際に三万五千坪ではなく、いっそ十万坪ぐらいあった方がいいんじゃないか、将来の夢があるということで物色されました。候補地としてあがったのは箕面の止々呂美、茨木の大岩、猪名川の肝川、それに現在の高槻・霊仙寺地区などですが、これらはいずれも十万坪以上あったそうです。

しかし、千里山から一時間以内で行けることが必須条件でした。昼間の交通渋滞時には一時間以上かかるかもしれませんが、夜だと三、四十分で行けるということで、高槻の霊仙寺になったわけです。でも、猪名川地区も最後まで高槻地区と競争しておりました。猪名川の肝川地区は、場所はよかったんです。しかし、池田で交通が大渋滞するので、たとえ池田の駅で降りたとしても、また、川西能勢口の方へ行ったとしても奥へ行けないということで、高槻に決まったわけです。また、大阪府の企画部長が「関西大学は兵庫県へ行かずに、ぜひ、大阪府内で……」と強く主張されたということも聞いております。

その間、いろいろ介在された方もいますし、企業も入れかわり立ちかわり入ってきました。個人の土地を買うのには大変難儀しました。折衝に当たったのは株式会社竹中土木と関西大学の施設課です。

箕面の場合は、開発した土地を用意するということで、金銭的には非常に高かった。また、行政の方からいうと、茨木市にはすでに大学がたくさんありましたが、高槻市には大阪医大しかなく、平安

女学院もようやく移転が決まったような状態ですから、大いに協力しようということもあったんです。

薗田　あれだけの土地を買うのは大変だったでしょうね。基本的には関西大学の千里山学舎から一時間以内に行ける場所であること。そして、幾つか候補があったけれども、その中で猪名川地区と高槻の霊仙寺地区とが最終的に残り、その後、高槻の方から熱心な勧誘があったり、また、大阪府からも関大にはぜひ大阪に残ってもらいたいという働きかけがあったりして、最終的に高槻の霊仙寺地区に決まっていくようですが、その辺のいきさつをもう少しお聞かせいただきたいと思います。

森本　猪名川の方は、池田という交通のネックがあることと、地主が遠方にいて、いわゆる地主の〝虫食い〟という状態が生じる恐れがあったこと、これを一つにまとめるのが大変だということでした。未買収用地が三カ所か四カ所残るということも考えられましたし、大阪府の企画部長から「関大は大阪で発祥しているのだから、大阪から出ていかない方がよい。そのための協力は惜しまない」という話もありまして高槻に決まったと思うんです。

薗田　記録によりますと、昭和五十五年十月に二つの地区に絞られた。その中から高槻に決まるのはいつなんでしょうか。

森本　理事会は昭和五十六年五月二十二日に高槻・霊仙寺地区の土地十一万坪購入の承認をしています。

破格に安かった高槻・霊仙寺地区の土地の値段

石川　高槻に決まった経緯で私が聞いているのは、東食という会社が土地をほとんど持っていたということが一つと、交通の便ももちろんありますが、値段が安かったことです。関係地主が十人ほど

と聞いています。地権関係は普通大変うるさいので、そういうことが大きな要因じゃなかったですかね。このころとしては破格に安い土地でした。当時は大体坪六十万円から八十万円ぐらいしていましたが、それが五万円かそこらです。

薗田　私も、何の委員会だったか忘れましたが、隣に工学部長の前田春興先生がいらっしゃって「土地は安いけれど、造成費に倍以上要る」と盛んにおっしゃったことを記憶しています。それでは価格の経緯に入りたいと思います。

森本　石川学長もおっしゃったように、東食という会社が十一万坪持っておりまして、その土地の値段が二十四億円です。

石川啓学長

そして非常に有利な条件で買うことができたのは、開発許可を得た時点で二十四億円の半分の十二億円を支払うが、開発許可が得られなかったら支払わないという条件で契約に入れたわけです。しかも残り十二億円は三年分割払いにしてもらいました。東食も一度に入るよりは、その方がいいということでした。隣接地の二万坪は個人地主の所有地であったもので、田畑は坪当たり八万五千円、その他の山林は六万五千円、合計は約二十億円でして、総合計で四十四億円の土地購入経費になります。

薗田　我々はこの金額を聞いてもぴんときませんが、四十四億円というのは安

森本靖一郎常務理事

いように思いますね。

石川　以前、近くにゴルフ場があったんですが、そこが住宅地（南平台）になった時は坪百万円でした。平均六万五千円、個人地主で八万五千円ですから、むちゃくちゃ安かったです。というのは、五つの法規制がかかっている土地だったからです。一番大きな規制は市街化調整区域です。ということは、農業しかできません。さらに近郊緑地保全区域で、また砂防法がかかっている。開発するには水質汚濁防止法や瀬戸内海環境保全特別措置法もクリアーしなければならない。稜線の変更をしたらだめとか、とにかく開発許可を得るためには、十以上の法に従わなければなりません。それをクリアーするためには行政の協力がなければとてもできないわけです。それで安いんです。近隣の平安女学院は手前の土地ですが、あそこは住宅地ですから、当時で坪百万円と聞いていましたね。

薗田　いろんな規制をクリアーしなけ

ればならないことが安い理由につながっていたようですが、次に学内で承認を得ていく過程を伺いたいと思います。

候補を三つに絞った懇談会答申

薗田　記録によりますと、昭和六十年六月に、石川先生が座長をお務めになっていた学園建設計画に関する懇談会から、学園建設委員会の委員長である大西昭男学長宛に「新校地の利用計画について」という答申が提出されております。これはいよいよ高槻に決定して、それを学内手続として進めていくという第一歩であったと思います。場所が決定して、今度はそこにどういう学部を構想していくかというところを石川先生からお聞きしたいと思います。

石川　その前に、話を少しさかのぼりたいと思います。先ほどご披露がありましたように、昭和五十六年の五月に理事会が土地の購入を決定したので、翌五十七年の十一月に、当時の稲野治兵衛副理事長が口頭で学園建設委員会に新校地の利用計画について諮問されたんです。その翌年（昭和五十八年）の六月、大西学長が教学充実計画委員会の長砂實委員長に新校地の利用計画について諮問をしておられます。その教学充実委員会からは、とりあえず新学部を作るのが望ましいということと、体育施設にまず活用したいという二つの内容の答申が十一月に出されました。

そして翌五十九年三月に久井理事長から大西学長に再度、学園の総合的充実計画の策定の一環として新校地をどのように使ったらよいかという諮問があったんです。ただ、ご承知のように、学園建設委員会というのは学部長、高等学校長、幼稚園長、各局長という大変忙しい方ばかりの委員会ですから、そう何回も開けないので、その年の六月に学園建設委員会の下部組織として学園建設計画に関する懇談会を設置することになり、当時、私が教学部長をしておりましたので委員長を拝命し、前年度の全学部長の先生に委員になっていただいて検討を始めたわけです。合宿も含めて六回ぐらい精力的に討議を進め、翌年の昭和六十年六月に、薗田先生からご紹介のあった答申を「新校地の利用計画について」ということで提出したわけです。

その討議は簡単に申しますと、極めてフリーな発想でいこうということで、それぞれの委員の方からどんな学部がいいか、いろんな案を出してもらいました。いっぱい出てきました。例えば「国際関係学部」であるとか、「生命科学部」であるとか、「理学部」であるとか、「人間科学部」であるとか、「比較文化学部」であるとか、「社会工学部」であるとか、「健康科学部」であるとか、あるいは「芸術学部」であるとか、一部には「体育学部」とおっしゃった人もおられたように記憶しております。

そして次にそれを整理統合していった

んですが、これがなかなか難しいんです。そこで建学の精神に戻りまして、本学の中心である「学の実化」の現代的展開は一体何であるかということから、当時、すでに学内で言われておりました国際化と情報化と科学技術の将来の進歩といったものを三本柱にして取捨選択をしていきました。三回ぐらい委員会を終わったところで「国際関係学部」「情報学部」「生命科学部」という三つに絞ったわけです。それぞれについて日本の内外の類似学部のデータを全部集めていただきまして、どういうカリキュラムでどういう教育をやっているかを調べました。そして大体のアウトラインが三者並列的にだんだん固まってきまして、大まかなカリキュラム的なものもできてきました。どのぐらいの学生数を募集できるかというのを策定して、それに対する費用概算もやりました。

社会学部ができるのには十年かかっています。それぐらい学内のコンセンサスを得るのは大変なんです。そこで学内議論に耐えるために、普通なら「この学部を作ればこんなメリットがありますよ」ということを書くんですが、そうすると大学の先生方は「こんなことを考えたか」「あんなデメリットをどう考えるか」とおっしゃいますので、この時はデメリットばかり書いたんです。国際関係学部ができる時のデメリットはこれこれでございます、情報学部ができる時のデメリットはこれでございます、バイオの時のデメリットはこれでございますというふうに、とにかく、デメリットの数をそろえて、たくさん挙げました。

もう一つの原則は、それまでの学部設立には既存学部に迷惑をかけないという一札が入っていたんですが、そういうことではどんな学部もできませんから、大学としての質的向上をめざして、それを諒とされるのならば、独立採算制みたいなことは言わないでほしい。そういうこともありました。

また、候補順についても苦心しました。本学の場合、大体、第二候補か第三候補が選択される可能性が高いわけです。この時の第一候補は「国際関係学部」でした。これの致命的欠点は、どの学問も本来国際性を持つものですから、あえて国際関係学部で何をめざすのか、ということでした。一つはエリアスタディー的な行き方がある。そのほかは相乗りになっている。そういうところが致命的な欠陥になるわけです。「バイオサイエンス」の致命的欠陥は、本学内において人的・物的資源が決定的に不足しているのと、競合性に弱いことです。「情報学部」は、そんなに多数ではないですが、比較的人はいらっしゃったわけです。しかし、欠陥は金がかかるということです。そういうことを答申いたしましたのが昭和六十年の六月でした。

キーコンセプトは「情報学」

石川　ところが、故人になられたある学部長さんが、高槻の地に化学関係の学部を何としても設立したいとすごい情熱を持っておられて、これを強く主張されたんです。ですから、答申案がかなり長い間伏せられました。ほとんどの先生は答申案をご存じないまま経過したんです。私自身は答申を公開してほしかったんですが、それへの対応がありました。化学関係の理学部的なものを高槻に作ると個人で話を進めておられたんですが、一番の欠陥は排水処理です。現在、高槻キャンパスには調整池がありますが、あそこへ化学関係の廃液をどんどん流したら、農業補償も含めて住民の大問題になります。それが致命的欠陥となり、この話は終わりました。

それから、次の大橋昭一教学部長のころですが、高槻校地利用計画に関する懇談会が発足するんです。これもはっきり申し上げますが、大学の先生方は、新たに委員になられると、前の答申を前提として議論しようということをなさらないわけです。また始めからやって、今度は慶應大学に調査に行かれたり、早稲田大学に調査に行かれたりして、出てきた最終案が二学部案です。「文芸学部」と何かだったでしょう。そして何とかそれと前答申をシンクロナイズさせるという作業が続いていくわけです。

そのころ、当時の久井理事長が大変心配されて、教学の意思決定過程に時間がかかり過ぎるということと、議論があっちへ行ったりこっちへ行ったりするというので、私は国内研修員だったんですが、特に個人的にご下問を受けまして、「おまえが何とか考えろ」と言われたんです。それは理事長からの個人的要請でした。

こうして、かなり形をなしてきたのが平成二年四月十五日のことです。その時、井上宏先生にご意見を伺ったりしましたが、いろいろ考えて「情報学部（仮称）」でいくより仕方がないと私は思ったわけです。そこで、昭和五十一年以降、平成二年までに五十の私立大学において情報関連学部・学科が設置されたので、それら先発の学部・学科との差別化を図るために、カリキュラムに次のような特色を盛り込めるよう留意しました。一つはハイテクに加えてクリエイティブな科目、ハイタッチを重視する、二番目は情報処理能力を重視する、三番目は実習を重視する、四番目は総合化、既存の知識の総合的再構成と運用です、五番目が創造的能力開発の重視、こういうことをやって、平成六年四月の発足に向けて準備しましょうということになりました。これは大西学長にも申しました。

それで平成二年十月に久井理事長から大西学長に改めて「高槻校地における新学部構想について」ということが諮問されたんです。そして、高岳館の問題もあるし、運動場の問題もありますが、新学部を作った方がよろしいということになったんです。さらに大橋教学部長の時の懇談会の答申と私の時の答申をシンクロ

ナイズさせるために「総合」という文字をかぶせたんです。「情報学部」だけだったら極めて情報科学的、情報工学的な色彩で受け止められるので、文理相乗り型という意味で「総合」という字を冠したんです。

それより以前、文部省は「総合」ということばを徹底的に嫌いました。理学部何々学科、情報工学何々、こういうふうにぴしっとやらないといけない。総合みたいなわけのわからないものはだめだ、ということだったんです。このことについては文教大学が先行していたので、そちらへ聞きに行ったら「えらく苦労した。文部省の審査委員会の専門委員は、情報学イコール情報工学である。情報工学の面からばっかり審査するから、コミュニケーション学は情報学と違うとバツにされた」というのです。

前後しますが、慶應大学が「環境情報学部」を作った時も大学設置審議会は大もめにもめたんです。「そんなものは認可しない」というのが国立大学系の委員です。私立大学系の委員は、当時の大西学長を初めとして「とにかくやらせたらいいじゃないか」ということで、「環境情報学部」が認められたのがファジーな学部名の最初です。それからの新しい学部構成というのは、皆さんご存じのように、「総合」がついているか、あるいは「国際」がついているか、あるいは「文化」がついているかです。「総合政策学部」「環境情報学部」というふうになるんです。それが平成二年ぐらいのことです。

このように情況が変わってきたので「総合」もいけるだろうということになったのが学園建設委員会への諮問なんです。新校地の利用という枠組みにおいて新学部構想が出てきて、さらに新学部はどういう学部にしたらいいのかについていろんな案が出てきて、最終的に三つから二つに絞られた。そして情報学を超えたプリンシプル、つまり文理相乗りの学部にするということになったわけです。さらに、三学科構成にはするけれども、キーコンセプトは「情報学（インフォマティックス）」です。既存の六学部が何らかの形で協力し合えるようなカリキュラム試案を作る。この三つの原則でまとまってきて平成三年になるんです。

「総合情報学部」の具体化に向けて活動開始

石川　平成三年に「高槻校地における新学部設置について」というのが学園建設委員会から学長に答申され、それを受けて学長提案として各学部教授会への審議に付されました。各学部教授会で大体の骨子が了承されたので、正式に活動を開始したのが平成三年の四月です。そして新学部設置事務室が開設され、同時に総合情報学部（仮称）設置準備委員会が発足するんです。委員長は大西学長です。

そこで、四百人規模の学部を作ろうと

いうことになり、三つの小委員会が置かれました。一つが教務関係小委員会、二つめが財務関係小委員会、三つめが施設設備関係小委員会で、その中の教務関係小委員会にさらに分科会が置かれまして、第一分科会が人文科学系で、学部でいうと社会学部と文学部で、その座長を私がしておりました。第二分科会が社会科学系で、学部でいいますと法学部と経済学部と商学部で、座長は中辻卯一先生、第三分科会が自然科学系で、工学部、座長は三上市蔵先生でした。それぞれ各学部から選出された委員が一人ずつここに所属し、さらに教養を設置するために一カ月遅れて第四分科会が置かれまして、これが外国語と保健体育について議するということで具体案が進み出すわけです。

そこで、カリキュラムの構成はフリーハンドでいこうということで、各委員が「総合情報学部」で提供すべきカリキュラムを思いつくまま全部リストアップしたんです。六百科目以上あったと思います。文学部はこれこれ、経済学部はこれこれ、工学部だけでも百二十科目ありました。これだったら五学部一大大学を作るみたいなものです。それをどう整理しようかという話になったわけです。当時の大橋教学部長がそれを持って文部省へ行かれたら、文部省の係官から言われたそうです。「先生のところはいくつの学部を作るんですか。これを見てもさっぱりコンセプトが伝わってきません。これは一体何ですか」と、ぼろくそでした。

難しいけれども、とにかくまとめなければいけないというので、それぞれの委員に宿題が与えられて、自分なりのまとめ方をしてこいということになったんです。ところが、委員は難しいとか何とか言って、なかなかしないんです。それで私は朝の五時までワープロを打ったこともありました。

とにかく六百四十もあるのを百ぐらいに絞らないことにはたたき台としてもどうにもならない。そのたたき台を委員会へ持っていって発表しました。それが今の情報学部のいろんなパンフに出ているカリキュラムの概念と展開図です。独断と偏見で、とりあえず整理したものです。

多くの学部設立の場合、委員は先生の顔を見て科目を決めるわけです。今回それはできません。先生の顔はなし。とにかく、こういう理念でこういう科目を設定しますということがまとまったら、学の内外を通じてどの先生がいいかということは委員が推薦しようということになりました。これが成功したと思うんです。顔を見ながらやったら、コンセプトをまとめるのが難しくて、まとめられなかったですよ。

そういうことでだんだん進んでいって、多少手直ししながら三つの領域で決めていきました。一つは知識情報系でやりました。その中で決めたのは、情報工学はやらないということです。これは一つの見識だと思うんです。ＣＡＤやらＣＡＭやらの情報工学はやらない。情報科学は

やる。もう一つは組織情報系だから、経営情報学とか、法学部、商学部、経済学部に関連するような情報学、もう一つは、女子学生も気にしなければならないから、メディア情報学と今言ってますが、どちらかというとソフトウェア関係のことをやる。あまり工学部的にやると学生は逃げていく所がないんです。だから、こっちの系統の科目も作っておいてやる。コンピュータのプログラミングの技術がなくても、クリエイティブなものをやったら卒業できるという実習も設けるという構想です。

苦労した教員編成

石川　さて、それから教務の先生です。一番肝心な所です。その時に井上先生の紹介で、東京大学の今の社会情報研究所長をしておられた高木先生にお会いしました。平成二年の春、日本新聞学会（現在、日本マスコミュニケーション学会）が三重県の松坂であったんですが、私はちょうど社会学部長だったから松坂まで行ったんです。初対面だったけれども「とにかく関大へ来てください」とお願いしたんです。その後、先生にご快諾いただいて、先生の東京大学定年退職と総合情報学部の発足までに二年のギャップがありましたから、社会学部に来ていただいて、キーパーソンとしてやっていただこうという話ができたんです。

今度はそれぞれが二人ぐらいの担当者を推薦する。その時も国際的に推薦しようということで、外国からもたくさん先生が来ていただけるようなことを考えていたんですが、予算がないので、リクルートは手紙だけで行い、ノーマン・クックさんが来た時には私は新大阪駅へ迎えに行って、向こうも知らないし、こっちも知らないのですが、関大の袋を目印にして会って、関大へ来る道で「こんな所だ」と説明しました。来賓室へ入って「サインしてください」と言うとサインしてくれたんです。あとから「早くサインし過ぎた。もっと条件をいろいろ決めてからしたらよかった」と言ってました。

高木教典
総合情報学部教授

それから委員会の中に人事委員会を作りまして、厳重な審査をしてもらったんです。委員の先生に報告してもらって投票をし、それを全体の委員会でご承認いただくというプロセスでやっていったんです。

しんどかったのは、総合情報学部に何人の教員を置いたらいいのかという基準が文部省の方になかったことです。そのため、我々は「三十六人ぐらいでできるんじゃないか」と言ったところ、「いや、総合なら、これとこれとこれとを合算し

たら五十四人は必要だ。しかも、その半数は教授でないとだめだ」と言うんです。助教授でも講師でもたくさんいらっしゃるんですが、教授でないとだめとなると、これはしんどかった。そして六学部からみんな行ってくださると思っていたら、うちの先生はなかなか行ってくれないんです。総論賛成でも「あなた行ってくれるか」と聞くと、「いや、私は行きません」と言うんです。だから、結果的に文学部と社会学部と経済学部と工学部からお移りいただいて、法学部と商学部からの移籍はゼロでした。

井上　名簿に名前が上がってましてね、ぎりぎりまで名前があって、移籍されるんじゃないかなと思っていても、会議が進んでいきますと、いつの間にか消えていたということもありましたね。

薗田　一番中心になってカリキュラムの編成などでご苦労になった石川先生にずっとお話しいただいて、司会が要らないぐらい進んできたんですが、高木先生にお出ましいただくあたりのことなどを井上先生、お願いします。

井上　学部長予定者が決まらないと人事の体制が組めない。とにかくいい先生はいないのかという話で、たまたま私は学会で高木先生と会ったりする機会もありましたし、全国的にも高木先生は著名ですから、非常にふさわしいんじゃないかということで、石川先生とも話をして、何回か高木先生のお宅にもお伺いしたり、外で会ったりしていろいろお話をしました。先ほど石川先生がおっしゃったように、ちょうど松阪で日本新聞学会が開かれ、そこにお見えになっているということで、石川先生と社会学部の大石準一先

井上宏総合情報学部教授

開発前の高槻キャンパス予定地（昭和57年12月17日）

生にも来ていただいて、ご説明をお願いしました。その時はまだ確答はいただけず、今度は東京へ大西学長と石川先生に出向いていただき、そこで学長からも正式に要請していただきました。それで高木先生の意思もだんだん固まってきたかなという感じでした。

スタッフにつきましては、最終的にどの先生が移っていただけるのかということが心配でしたね。私は石川先生からもいろいろ言われていましたし、そのままずっと走っておりましたが、移籍されるんじゃないかなと思っていても、踏みとどまられた先生方もいました。

それから、実際に科目を立てて依頼して歩かなければいけませんので、これは手分けをして、随分いろんな先生方を煩わせることになりました。公募という形でなく、人のツテを頼って、いろいろ情報を集めて、初対面でも会いに行って、断られるケースもありました。最初は五十四人でしたか。

石川　そうですね。助手が三名で、五十七名。

井上　助手三人は公募で試験しました。スタッフを集めるのは皆さん随分ご苦労があったと思います。

薗田　移籍は何人ですか。

高木　私を含めて新学部に就任することを前提に関西大学に着任していた者が三人おりましたので、それを入れまして十一名でした。ですから、以前から関西大学におられた方は八名だけですね。

井上　そういう意味では、圧倒的多数の方々はいろんな所から来ていただいた。そういう教員集団になったわけです。

石川　五十七人の専任教員の出身大学が二十六大学ですから、何よりも学閥はないという証左です。だから、大先生においでいただく時にも、助教授、助手を引き連れてのご就任はお断り申し上げました。「先生だけ来ていただきたい」と、言いにくいことも言いました。

重視された開発利用目的

薗田　話が大分前に進みましたが、施設面の話が抜けております。私のメモによりますと、石川先生の答申が出たのが昭和六十年六月、それから若干紆余曲折があって、平成三年四月に設置準備委員会が成立して、ここから本格的に動き出したということですね。土地の購入の問題につきましても、昭和六十二年四月に大阪府の方へ開発申請書を提出して、九月に許可がおり、それに伴って理事会の方でも所有権移転の手続を進めております。そして六十三年四月にいよいよ造成工事に着工しています。それから三年かかって平成三年三月に造成工事が終わったのですが、施設面の整備についてお話しいただけますか。

林　昭和五十八年に売買契約を結び、大阪府へ開発申請をしたんですが、その時、開発するための利用目的は何かとい

うことがすごく重要視されたんです。千里山の開発をしている時は、グラウンドにするとか校舎を建てるとか言えば認められていたんですが、法的に厳しくなりまして、何に使うのかということをものすごく言われました。法人の方で勝手に「こんなものに使う」と言うわけにはいきませんでした。

それで、石川先生が教学部長をされていました時に、こんな学部を作ろうとか、下は体育施設で、上は学舎用地だといった案を書いていただきました。とにかく造成できないとだめですから、開発目的をしっかり出さなければいけないんです。大学の中で意思決定するのにかなり時間がかかりまして、申請もすぐできなかったわけです。

教学を拘束しない範囲で、こういう計画でやりますという形の理事会議事録で事業計画を出したこともあります。それで認められまして、その目的をもって大阪府にも出し、あるいは国税局にも出しました。これは地主に税の特別控除をしていただくよう国税局に認めてもらう必要があったのです。

昭和五十八年に出しまして、初めは概要でしたが、だんだん詰めていくことになったわけです。それと、高槻市は大規模開発で関西大学がこういう目的で来るということを、まず市の意見書として大阪府に出さなければならない。意見書というのは、どういう目的でどういうことをするという前に、高槻市としてはこの計画を諒とする、また、ぜひこういうふうにしたいという強い要望を市から大阪府に出すものです。その内容に沿って、我々は計画書や造成工事概要とかを出していくんです。何回も何回も案を出しまして、大阪府と高槻市とでずっと協議しまして、作り上げるのに十回以上改訂しました。その結果、高槻市から昭和六十年四月九日付で大阪府へ意見書を提出してもらいました。それが大阪府土地利用等調整協議会で検討され、基本計画は諒とされたのです。その後、詳細について関係者から指導を受けたり、協議を行ったりして進めました。そして最終的には昭和六十二年七月三十一日に大阪府の昭和六十二年度第一六九回開発審査会で審査されたのです。

規制のクリアーに苦心

薗田　先ほど石川先生のお話では非常に多くの規制があったということですが、その辺の規制クリアーのご苦労はいかがでしたか。

林　一番大変なのが石川先生もおっしゃいましたけれど、市街化調整区域と近郊緑地保全区域、それともう一つは水質汚濁防止法に関連する瀬戸内海環境保全特別措置法です。これは瀬戸内海に流れていく河川に排水を流す場合のＣＯＤは五ｐｐｍ以下で流しなさいというものです。また、近郊緑地保全区域というのは、緑地の確保にウエイトを置いているだけ

でなく、環境保全も重要であるということから、国定公園に準じた規制をかけるというものです。そのため、建築物には高さや面積の点で制限が設けられています。この三つが特に大きかったです。そのほかにも砂防法とか宅造規制区域とかいろいろありましたが、茨木土木事務所や高槻市や大阪府の本庁とかに何回も行きまして、少しずつ教えてもらいながら、こうすればクリアーできるということをやっていったわけです。

薗田　開発認可がおりたということは、それがクリアーされたということで、昭和六十二年八月に開発行為許可が出てますね。

林　はい。我々の方で出した資料をもとに、この開発行為を認めるかどうかという大阪府の開発審査会というのがありまして、そこでOKになりまして、その後、また関連法規のいろんな届けがありますが、八月に許可を得られました。工事の方は、昭和六十二年十二月から防災工事を先にやり出したんです。

薗田　天然記念物のサンショウウオがいたんですか。

林　大阪府にはいろんな関連課が二十課ぐらいあるんです。その全部の課がOKを出さないといけないわけです。オオサンショウウオの件は、文化財保護課から調べろと言われました。昔、下流の巡礼橋の近くで特別記念物のオオサンショウウオが発見されたんです。我々の校地の中に細い小川みたいな源流が三本あったので調べろというわけです。調べるについては専門家でないといけない。大阪府からこういう専門家がいますよということを教えてもらい、須磨海浜水族園副園長の原島一彦先生にお願いしました。

岸昌大阪府知事から開発行為許可証を受け取る久井忠雄理事長（昭和62年8月29日）

オオサンショウウオは夜行性だからということで、夜、六時が過ぎてから川の中をずっと歩いて生存を確認しなければならない。私は一番前を歩きました。街灯も何もありませんから、真っ暗なんです。十一月ごろなんですが、とにかく真っ暗ですから、カーバイトランプを前にさげて、片手にクモの巣をはらう棒を持ちまして、三回ほど歩きました。結局、見つからず、それでOKということになりました。

もう一つ困りましたのが、調整池の大きさの問題です。上を伐採しまして造成

しますと、雨が降った時に土砂が出る。この件は窓口が茨木土木事務所で、大阪府の河川課が指導するわけです。茨木土木事務所へ行きましたら、百年に一回の降水量にも耐え得る調整池を作りなさいと言われました。そうすると、防災の調整池の堰堤工事などで段々お金が膨らんでくるわけです。購入が四十四億円です。造成工事は一平方メートルあたりいくらぐらいという勘定はあるわけですが、補償とかいろんなことで「槌より柄が太くなるな」ということをさんざん言われまして、非常に苦労した記憶があります。同志社大学が田辺で造成されていますね。あの時は買い値が坪千円ぐらいの土地を昔、近鉄からたくさん譲り受けておられたらしいんですが、それを開発するのに、河川改修費とかＪＲや近鉄の駅舎改修費、さらに近鉄から同志社までの道路整備費、そういうものを全部負担して六十億前後の関連費用を出されているようなんです。それで「うちは槌より柄が太くなるな」ということをさんざん言われたわけです。

薗田　造成費はどれぐらいですか。

林　四十五億円ぐらいです。十三万五千坪ほどありまして全部で九十億円ですから、坪当たりが七、八万円ぐらいになるわけです。ただし、実際に使えるのが四割ですから、十七、八万円というところです。それでも、先ほど石川先生がおっしゃったように、横には百万円の南平台という住宅地がありますし、もうちょっと奥に月見台という住宅地があるんですが、そこでも五、六十万円ですから、採算はとれているだろうということです。

それから、高槻市は誘致はするけれども、お金がないから補助ができない。その代わり、自分らにできることは一所懸命しましょうと言ってくれました。一番大きかったのは、女瀬川という普通河川を一級河川に格上げしてくれたことです。この川は名神高速道路あたりまでが一級河川で、そこから上流は普通河川だったんです。高槻校地の所は普通河川です。普通河川については高槻市が管理していますので、本来だったら改修は高槻市がするんですが、お金がないから、そういう場合は開発者の方で負担しなければいけないということが往々にしてあるわけです。それを高槻市の方は何とかしようということで、まず一級河川への格上げを大阪府に申請されまして、建設省とか大阪府とかいろいろ行って、補助金をもらって改修するようにされたんです。ですから、国の方から二分の一か三分の二を支出してもらい、大阪府がその残りを出して改修されました。高槻市の金銭的負担はないんですが、いろんな開発の関係でやっていただいたことがあります。

薗田　氷室地区の汚水排水の問題も高槻市が大変協力してくれたんですね。

林　それは、先ほどちょっと申し上げました内海法（瀬戸内海環境保全特別措置法の略称）というもので、非常にシビアな排水処理をしなければならない。排水処理施設を作るだけでも二億円以上か

かるんです。それで氷室地区の方へ汚水を流すのに、工学部系統を除いた普通の学部で四千万円の補償を払うということで話がついていたんですが、その後、高槻市といろいろ話をしまして、高槻市が大学まで公共下水を引っ張ってくれることになりました。それで結局公共下水に流すことになりましたから、内海法の規制も不要になり、排水の補償は要らないだろうということで、ゼロになりました。

薗田　ほかに補っていただくことがありましたらどうぞ。

林　先ほどオオサンショウウオの話が出たんですが、それは高槻校地の下の方です。高槻校地の北西側に田んぼがあったんですが、そこには昔、カスミサンショウウオがいたんです。それで、高槻市の町を美しくする課（通称町美課、現在は緑政室）のもとにある高槻市生活環境審議会の委員である京都大学の村上興正先生が社会学部の鉄川精先生（現工学部）に頼みなさいということを高槻市に言われたんです。それで先生に三回ほどご一緒してもらい、大変ご苦労いただきました。ドジョウとかエビがいました。

高木教授の招聘と学部長就任

薗田　そういうことで教学面もいろいろご苦労いただき、そして施設の方も平成三年三月には造成工事が完了いたしました。七月には高岳館の地鎮祭が行われ、その直後、久井理事長が亡くなられてますが、いよいよ四年九月から具体的な総合情報学部の学舎着工となります。四年四月には高木先生にお越しいただき、新学部の設立に動き出すわけですが、高木先生にお越しいただいたあたりを先生ご自身から伺いたいと思います。

高木　石川先生や井上先生からお話があったとおり松阪で学会がありました際に、おそろいでおいでいただきまして、初めてお話を伺いました。井上先生とは大変親しくさせていただいておりましたので、いろいろお話を伺いました。そのうち大西先生からも大変熱心なお誘いをいただいたわけですが、私は関西とは地縁もございませんでしたので、当初は寝耳に水的なお話だと承っておりました。

もう一つは、確答をしたわけではないんですが、ありがたいことに、東京でも幾つかの大学からお誘いをいただいておりました。ただ、お話がありましたころには、すでに関西大学の大変魅力的な計画が進んでいたわけです。

前任校（東京大学）で私は研究所長と大学院の研究科委員長を兼任していまして、社会情報学ということを提唱して社会学研究科の中でまず新聞学専攻を社会

薗田香融年史編纂委員長

情報学専攻に改組し、続いて新聞研究所――これはコミュニケーション、マスコミュニケーションだけではなくて、情報化の研究に取り組んでいた研究所ですが、これを社会情報研究所へ改組することを計画していました。これは定年の時に文部省、大蔵省、総務庁、それと法制局の承認を取ることができ、社会情報研究所に改組でき、資料センターを情報メディア研究資料センターに改組することもできました。そういう視野でものを考えていたこともあって大変魅力を感じた次第です。

神堀忍年史編纂副委員長

それからもう一つは、社会科学者として、一極集中の解消、地域格差解消ということが、私の専門分野でもいつも問題意識の中にありました。地域格差の解消は一村一品ではだめで、ナンバー2をナンバー1とは違う個性を持った地域として発展させる、さらにナンバー3はそれまでの1、2とも違う個性を持った地域として発展させるという方向性を考えないとだめだということを言っておりましたから、大阪からのお話は、言行一致という観点からいいますと、真剣に考えなくちゃいけないというように考えました。

ただ、心配になりましたのは、前任校のOBは、赴任した先で学部長等を引き受けなくてはならないケースがままあったようですし、新設学部は難しいと聞いておりましたので、率直に大西先生に「一体私はどういう役割を果たせばよろしいんですか。何を期待されてますか」と伺ったんですが、大西先生は「中心教授の一人としてお働きいただければ結構です」とおっしゃってくださったものですから、私は安心して着任のお返事をさせていただきました。着任しましたら、早々に設置準備委員会に委員として参加することになりました。その時にはすでに計画の大部分はできていまして、私は欠けている人事について人を探すとか、多少メディア情報関係についてコメントをさせていただいた程度です。ところが、先ほどのお話のとおり、委員の先生方はどなたもお移りにならない。計画されている先生方がお移りにならないとすると、誰が責任を負ってくださるのだろうと心配していましたら、大西先生が「一緒に文部省に行ってくださいませんか」とおっしゃいましたので、お供しているうちに、いつの間にか（学部長）予定者として文部省へ行っているようにとられかねないことになりました。さらに「学部長を引き受けてもらえますか」という石川先生のお話がありまして、大変困ったので、留保させていただきました。移籍に積極的な先生がおられない中で、委員のお一人だった井上先生がご一緒してくだ

さるのならお引き受けしてもいいかなという気になりまして、井上先生を無理やりご苦労いただくことに引き込んだという経緯がございました。

難問が山積した開設準備

高木　実際に私どもが本当に忙しくなりましたのは、平成五年五月に開設準備委員会が発足してからです。文部省折衝で大変いい感触が得られていたので、具体的な開設準備に入っていたわけですが、最後の年ですから、万が一人事の審査で落ちると、あとの人事補充が大変です。特に夏休みは、井上先生や私は携帯電話を持ちまして情報交換をしあい、一番気がかりな時期を過ごしましたが、実際の作業は、新しいものを作る時の大変活気に満ちた充実感がありました。我々委員も忙しかったのですが、事務局が大変だったと思います。私どもも課題があって、研究室に午後九時ぐらいまでいることがかなり多かったのですが、帰りに関西大学会館の前へ回ってきますと、夜の九時過ぎでも学長室の上の三階の開設準備室だけは必ず電気がついていました。それで会館に上がっていくと、またちゃんと仕事が待っているのですね。新学部設置事務室の事務局の皆さんはほとんど連日、十時十一時ぐらいまではいらしたことが多かったと思います。井上先生ともよく病人が出ないかという心配をいたしました。

先ほど敷地の問題で大変ご苦労になられた話がありましたが、地域住民の方々との関係もまた大変でした。例えばバスの計画も、当初は西の口、正門のところが終点だったのですが、地形上の理由から公道を通って上まで上がることになりまして、地元に反対運動が起こりました。そして、開校のぎりぎりまで地元と決着がつかなかったのです。地元の方々との折衝は、岩村局長を中心に頻繁に繰り返されました。

それから、学生の住居を果たして確保できるのかという心配もありました。それで、事務局が地元の地主の方々に依頼して、一定の条件を備えたリーズナブルな料金のワンルームマンションを建ててもらったりもしました。現在、全室総合情報学部の学生が入居しているマンションもあります。そういう地元の住民の方々との折衝等を含めて大変な作業が続いたわけです。

その中で、これはある意味では楽しかったのですが、さまざまなPR活動を積極的に展開しました。PRパンフレットや石川先生にも出ていただきました全国のCATV百二十局ネットで放映されたPR番組制作。フジテレビ系列で放送された学部紹介番組の取材。そのほかに、全国の受験雑誌のほとんど全部と全国の有力予備校の雑誌から取材依頼がありまして、これは原稿を書くのから、インタビューとその原稿の手直しなど片っ端からおつき合いしました。高校説明会を開

催したり、事務局の教員職員で分担しながら予備校回りも盛んにやりました。

関西大学の開設する学部だということと反響も大変よかったので、かなり受験生が来てくれるとは思っておりましたが、ふたを開けてみるまではやはり不安でした。PR活動や多くのメディアがいろいろ取り上げてくれたこともありますが、学部の性格が大変新鮮な、時代の要請に応えるようなものでなければ、あれだけの反響は生まれなかったと思います。その意味では石川先生を中心に進められてきた関西大学の計画はすばらしかったと思います。新しいことを計画し、実現するのは、今の大学ではなかなか難しいのですが、総合情報学部を計画し、生み出すことができた関西大学は、法人、大学、教員、職員に大変な力量があったのだなと思っています。

学部の準備過程でも、発足後でも、私のように外から来ました者にとって大変な驚きだったのは、事務局の皆さんが大変有能かつ積極的で、前任校とは比較にならないような力量と仕事に対する熱意をお持ちだということで、大変感銘を受けました。そういう支えがあったからこそ新しい学部を発足させることができ、軌道に乗せることもできたのではないかなと思っています。

薗田　先生も、ご着任早々、関大の人使いの荒いのに驚かれたことでしょう。

好意的だった設置構想に対するヒアリング

薗田　今、先生のお話の中にもありましたが、文部省との折衝の問題が残っています。私のメモでは、平成四年四月に第一次認可申請を提出し、同年十月にヒアリングが行われ、平成五年九月に実地審査があり、翌年、認可がおりた。こういう運びになったように伺っています。このあたりを石川先生からお願いします。

石川　先ほどちょっとお話ししたんですが、実際に始めたのは平成三年四月で、小委員会ができる時にはすでにスケルトンはできていましたから、半年ほどいろいろ議論していただいて、平成三年九月から事前指導、事前相談というのがありまして、四回か五回行って、大体こんな構想でどうだろうということがあったんです。

当時、新学部の設置は二年審査になっていましたから、平成四年四月に設置構想を主体にして書類を出すわけです。学部設立の理念とか体制とか、設置構想はいいかどうかという書類が主ですが、それを出してから文部省の面接調査があるんです。それをやってよろしいということになりましたので、いよいよその翌年の平成五年六月には全部の書類を集めなければいけないわけです。実際、文部省との折衝が一番活発になったのは平成五年ですが、平成四年に設置構想を出して、その時のヒアリングは、亡くなった前の法政大学総長の青木宗也先生が主宰だっ

たですが、極めて好意的だったんです。大西学長に「先生、いい学校を作ってくださいね」ということで、激励されたようなこともありました。

文部省への提出書類が輸送中に追突事故に遭う

石川　しんどかったのは、正式書類を出す時に、新学舎の建設が八割ぐらいでき上がってないといけないということでした。文部省がこれをバツにしたらどうするんだろうかと思いました。私立大学は必死の思いで多額の資金を投入して建築を始めているんですからね。地鎮祭があったのは平成四年九月です。

そして、平成五年一月には第一次認可申請はよろしい。したがって、六月末までに第二次申請として全部の書類をまとめてこいということになりました。これが膨大な書類なんです。法人分科会へ出すのは地権関係がありまして、六人の地主ですが、関係者が五十何人で、うまく相続してないわけです。そうすると、相続権利者の全部が関西大学に土地を売りましたという謄本をつけないといけないわけです。それからどういう学舎を建築するかについては、施工内容が確定した設計図、また、それぞれの部屋にどんな機器を入れるのかということもあります。植木を植える景観のこともありました。

一番すごいのは、教員五十七名についての調書なんです。ベテランの先生は論文が百以上あります。その百以上のサマリー（概要）をつけなければいけないわけです。今はそれが簡素化されたんですが、年配の先生だったら四十年前、五十年前に書かれた論文もあります。それがどこに出て、その内容はどうかというので、一人について五十ページぐらいになります。それが五十七人ですから、ものすごい量です。それを三十部出すんです。そしたら、運んでいった業者のトラックが途中で事故に遭ったんです。真っ青になりました。予定の日までに着かなければいけないわけです。

高木　トラックの運転手さんが血だらけになりながら、タクシーに積んで届けてくれたのには感激しました。

石山　運転手さんのことを言っておきますと、日隆（ひだか）運輸という会社の若い運転手さんでした。都内の高速道路で渋滞に巻き込まれて停まった所へ十トントラックが居眠りで追突したわけです。車は五トンぐらいの大きさだったんですが、後ろが全部つぶれました。本来ですと荷物は後ろに積んでおくんですが、その時は社長から「これは非常に大事なものだから」と言われたので助手席と仮眠室の所へ積んでいたんです。それで破損を免れて、本人は大怪我を負ったんですが、タクシーを拾ってホテルまで運んでくれました。それでぎりぎり申請に間に合いました。その報告をしましたら、大西学長が「若いのに立派だ。これは表彰しないといけないな」とおっしゃったのを覚え

ています。

石川　その運転手は責任において文部省へ運んでくれたんです。手でさげていけるような分量ではありません。物すごい書類です。それを出したのが平成五年六月です。その前後から手分けしていろんな所へ行きましたが、五十回か六十回ぐらい文部省へ行ってますね。

新設学部では日本一の志願者数

石川　平成五年十二月に最終的な認可をいただいたわけですが、関西大学としては二月に試験をしますから、総合情報学部ができますよということを早く宣伝したいわけです。今はOKになったんですが、当時は認可されてない学部の宣伝をするのはまかりならんというので、高木先生がおっしゃったように、パーソナルコミュニケーションです。高等学校の先生を集めて「こんなことだからひとつ……」ということと、認可されて直後の日曜日の朝に全国紙の全面広告をする。あれは一億円ぐらいかかりました。もちろん用意しておかないと、認可されてからではできませんからね。全国の推薦指定高校へ先生と事務長が出かけて学部の案内をするようなこともしました。

そういうことで、二月から受験生を募集して、とりあえずの志願者数は一万五千五百八十五人、新設学部では全国一ですよ。四百人定員ですが、指定校推薦、一高からの入学者、それに別試験の社会人と帰国生徒定員を除きますと、一般入試枠は二百七十人ですから、五十八倍という物すごい競争率になりまして、第一期生の一般方式による合格最低点は、一〇〇点満点に直すと八五点。七学部の中で突出した高得点です。総合情報学部はとても難しいということになったわけです。

高木　新聞広告も仕事としては面白かったのですが、当然予算の制約があります。その予算で何とか全国広告にする方法はないか、新聞の数を増やす方法はないかということで私がキャプションを考えまして〝私たちの夢でもあります〟というキャッチフレーズを考えて、「これを持って竹中（工務店）さんへ行ってみてください」と事務局にお願いしましたところ、竹中工務店から紀伊國屋、丸善に至るまで大変喜んで、応分のお金を出して広告の下に社名を出していただけました。それで主要全国紙の全国広告と一部地方紙に広告を掲載することができました。広告の案文は皆であれこれ議論して、広告会社のイメージ広告をほとんど変えてしまいましたが、学部の性格を理解してもらえるものになったと思います。

反響は私たちの予想を超えていました。スタートダッシュが大事ということで、準備室では内々「三十倍ぐらい集めたいね」と言っていたのですが、予想を上回るような反響があって、本当に驚いた次第です。

これは今までのお話に出てきませんで

したが、正式に議論されたのではなかったと思いますが、学校法人関西大学の運営する別の大学という考え方も、プロセスの中であったようですが、総合情報学部が関西大学の学部として新設されたことが重要だと思います。長い歴史と、評価を高めて発展してきた関西大学が、時代の要請に応える学部を作ったということが、あれだけの反響を呼んだ大きな原因だったのではないでしょうか。

薗田　いろいろご苦労があったと思いますが、過去十年間でトップの志願者数があった。新聞に記事が掲載された時は「やった！」と言われた加藤さん、何か感想はございますか。

加藤　先ほども石川先生がおっしゃってましたように、申請書だけでダンボール箱に五、六箱ぐらい運んだ経過がありますので、新聞に大々的に載った時にはうれしかったです。

左から井上教授、高木教授、石川学長

暗中模索の学部スタート

薗田　順風満帆というか、大変大きな反響の中で開校にこぎつけたわけですが、現在の教学体制という所に入ります。平成六年四月に総合情報学部が成立するのですが、その前は教授会がなくて、委員会で決めたんですね。教学体制の編成ということをお聞かせいただきたいと思います。

高木　学部が開設される前に、教員の就任予定者には必要な文書を作ってもらうような連絡は絶えずありましたが、ほかに、事務局が学部の準備状況を連絡する「総合情報学部通信」を発行して準備状況や必要な情報を教員予定者にお伝えしていました。そのほかに二度、全教員予定者に集まっていただいて、学部の理念とか構成、教育方針、カリキュラムなどをいろいろとご説明し、意見を聞く機会を設けたわけですが、皆さんが就任さ

れて学部が始まってみると、いろいろ苦労されたと思います。

特にコンピュータを多数要する学部ですが、建物の引き渡し期日との関係でコンピュータ等を学舎に運び込めない。そうかといって四月にすぐ稼働できるような体制も作らなくてはいけないということで、高岳館で泊り込みも含め、就任予定の教員や職員の方々は、コンピュータを立ち上がらせるために何週間も泊り込んで作業するなど、大変苦労して準備作業が行われました。

井上　そして、セメスター制で始まったんです。これも初めての経験でしたから、教員の方も忙しかったですね。

薗田　私も関大に長い間いますが、セメスターとかシラバス（授業計画）とか、聞いたことのない言葉を耳にするようになりましたのは、総合情報学部ができてからですね。

高木　いざ学部が始まってみますと、教員はみんなそれぞれ意欲に燃えて就任してみえたわけですが、大学にいた教員の場合も初めてのことが実にたくさんあるわけです。セメスター制も初めて、シラバスは前から出してもらっていますが、それに基づいてきちんと教材を作りなさいとか、休講は認めません、必ず土曜日に補講しなさいとか、そういう新しい教育方針をいろいろと盛り込んでおりましたので、非常に戸惑いもあったと思います。

特に教材作成は、かなり準備してきた場合でも非常に大変だったと思います。研究室にソファーベッドが入っていますので、毛布を持ってきて泊り込んで教材を作成する教員もかなりありました。大変熱心に、しかも意欲的に新しい教育を軌道に乗せる努力がなされましたが、何分にも新しい教育で、しかも大学が初めてという教員も多かったものですから、立ち上がりは苦労が多かったと思います。

井上　一年に入ってすぐ基本ソフトウェア実習が必須で入ってきます。全学生が実習を受けなければいけない。コンピュータはうまく稼働してくれて、実習は支障なくできたんですが、クラスがたくさんあって、教える先生方がばらばらなわけですから、テキストを統一的に作るということでは、実習担当の先生方が随分苦労されておりました。結果的には代表者が作って、軌道に乗りました。

高木　そういう意味で、滑り出しは順調だったように思われますが、いろいろ難しい問題がありました。機器をめぐる問題ですと、付随したソフトがいろいろ必要だという要望が強くなったり、意欲を持てば持つほど、それなりに性能のいい機械が欲しいという要望も出てまいります。

薗田　コンピュータの機種選定は難しかったでしょう。

井上　石川先生はよくご存じですが、選定の専門委員会を作りました。

石川　いろいろ議論を重ねて最終的には決めました。

高木　当初、編入の二年次を発足時から採りたいという計画を文部省に持ち込んだことがあるんです。でも、文部省は「幾ら何でも発足時にいきなり二年次を作るのはいかがなものか。二年目の二年次編入からにしてください」ということでした。そこで、当初からの二年次編入を取りやめる代わりに、その教育に予定した機器の導入は二年間待ってほしいという折衝をいたしました。これについては文部省の了承を得たのですが、一年の間に機器の値下りがあって、申請で約束した機器の購入によって多少の余剰が出てくる。ところが、文部省へ申請した機器購入予算は機器の購入に使わなければいけない。そうすると、機器は進歩しておりますのでいろいろと注文が出てまいりまして、発足後、機器の選定をめぐって教員間で意見の違いなどが出てきまして、それらの調整はかなり難しかったように思います。何もかも必ずしも順風満帆に進んだわけではないということです。

そして、ざっくばらんに申し上げますと、いろんな専門の人が複合している学部の難しさといいますか、特に自然科学と社会科学に、ほかの大学や学部でいいますと一般教養課程に相当するような科目や外国語担当の教員で構成されていて、学科も専攻もない学生はモデルで履修するシステムです。いろいろな委員会で業務分担をする体制をとっているわけですが、なかなか理想どおりにはいかない面もあります。学部の運営方式は年月を経て固めていかなければならない課題だと思います。

歩留りの計算にアンケートを利用

井上　入学試験実施にあたっての一つ大きな問題は、データがないわけですから、歩留りがどうなるかということでした。他学部のことをいろいろ勉強しましたが、結局は全受験生にアンケートを書いてもらいました。「通ったら総合情報学部に来るか来ないか」とか。結果的にはあのアンケートに助けられました。それを急いで集計して、英・数パターン、英・国パターンとか、受験科目をパターン別に分けて歩留りを読み取って、それを参考にしながら査定に当たったんです。もし、あれがなかったら、どの辺で線を引いていいのか、ちょっと見当がつかなかったと思います。全学の先生方に協力を得られたからあのアンケートができたんです。

薗田　結局、歩留りはどれぐらいでしたか。

高木　（文部省基準の）一・三倍を超えてしまいました

井上　S日程とA日程とはちょっと違ったんですが、実質四百名の募集のうち、留学生は二十人、社会人は十人、一高からの進学、指定校推薦でいくらと、いろいろ枠を作っていまして、それを全部差し引いていきますと二百七十人だったんです。それを百三十五と百三十五に分け

まして、結局、S日程の歩留りは前半が四四・八%、後半が六九・六%でした。結果的には予想を少しオーバーしました。

高木　学生については、大変倍率の高い試験を通ってきた学生だけでなく、指定校推薦で入ってきた学生も大変優秀で意欲があり、通常、授業は私語が多くてうるさいということをいろいろな大学で聞くのですが、私語のない授業が初めから続いているというのが特徴だと思います。

めざすは〝情報ジェネラリスト〟の育成

薗田　新しい学部の教学方針、あるいは特徴的な運営方針ということを高木先生、井上先生からお聞かせいただきたいと思います。

高木　学部の理念は石川先生を中心に学部計画が検討された中で固まったのですが、情報教養人といいますか、問題意識を持って情報技術を駆使できる、視野の広い、しかも国際性を身につけた人材の育成、それを受け入れやすいように私が〝情報ジェネラリスト〟に言い換えたわけですが、そうした人材を育成するという学部の理念は社会的な評価を得られたのではないかと思っています。今後の日本社会の発展のためにも非常に大事な教育の理念だということでいろいろなメディアでも評価されたのではないでしょうか。

完成した高槻キャンパス

学生は西日本だけではなく、北海道、東北、関東からもかなり来ています。総合情報学部を志望した動機を聞きますと、先生や親の判断ではなく、自分の判断で来ている。学部の理念と新しい教育方針が学生諸君に将来を確信させるものがあったんじゃないかと思います。

就職はこれからですが、これまでのいろいろな調査によりますと、かなり期待できるように思います。多少初物食い的な関心から求人してくれる企業もあろうかと思いますが、その期待に応えられる

ような学生を送り出さないと学部の評価を確立できません。就職に関しては、大学全体として大変ご努力をいただいておりますが、学部としても就職委員会を設けてそれに大変努力している状況です。

総合情報学部は、学生にとっては、きちんと授業や実習に出なくてはいけない、勤勉でなければならない忙しい学部ですが、運動部に入って活躍しているとか、サークルに入っている学生の比率も高くサークル加入比率は全学で一番高い学部です。時間を有効に使ったり張りのある学生生活を送っている学生が多いようです。

特に学習面では、これは石川先生のご英断だと思いますが、夜も遅くまでコンピュータ室を開放していますので九時半ごろまでコンピュータに取り組んでいる学生がたくさんおります。ですから、実習の成果も、他大学と比べてみますと非常に上がっているんじゃないかと思います。入って二カ月もすればブラインドタッチでレポートが打てるという達成度ですので、非常に速いといえます。演習の連絡等にはパソコンネットやメールが活躍しておりまして、学生の連絡はメールが多いようで、そういう意味では、理念に沿った教育成果が当初の予想以上に達成できているんじゃないかなと感じています。

井上　ちょっと戻りますが、学部がスタートして、教員組織の問題でちょっと苦労したことがあります。一学科で五十四名の就任が初年度にあったわけですが、それでは学部の意思形成がなかなかうまくいきませんので、いろんな委員会、例えば学部運営委員会とか将来構想委員会とか、自己点検・評価委員会とか教務委員会とか担当者会議とか、全部で二十の委員会、担当者会議を組織しまして、全員がどこかに加わって学部運営にかかわるという学部運営の方法を編み出したんです。試行錯誤しながらでしたが、一応のレールを敷きました。何しろ一学科で世帯が大きいわけですから、その辺の工夫が大変でした。

それから、学生の卒業所要単位としては百三十八単位ですが、百二十単位ということで三つのモデルを作り、それを下敷きに自分の履修科目を選んでいきなさいという指導をしたわけです。モデルは必ずしも「ねばならない」というように縛ってはおらず、一応下敷きにして自分の履修科目を作っていきなさいという形です。学生は自分で考えて履修科目を選んでいかなければならない。これは私はいいような気がしています。つまり、与えられて、そのレールの上を走るというのではなく、興味のあるものと自分の将来性を考えて、自分で作っていかなければならない。そういうことが学生に受けているのではないかなという気がしているんです。

そういうことですから、自分は理系人間だとか、文系人間だといった自己限定はしないように奨励しています。文系的

な興味があっても、コンピュータ科学の理系的な科目をとりたい子はどんどんとればいいわけです。またその逆もあるわけです。ですから、その辺の考え方も、いろんな企業の方とお話をすると、割合受け入れていただいているなという気がします。新しい人材の育成をめざさなければいけないわけですから、そのあたりを強調しています。

高木　新しいキャンパスに設立された新しい学部固有の問題に言及させていただきますと新しい大学なり学部ができる場合は、地域の人たちとの交流の歴史がありません。総合情報学部は地域社会にとってはインベーダーですから、学部として地域社会との関係を大変重視しました。大学は地域社会に支えられることなしに存続、発展はできませんので、大学としても地域社会のためにいろいろと貢献する面がなければならないと考えたわけです。そのためにまず大学を知ってもらおうということで、開設と同時に、五月の最終の日曜日に「オープンキャンパス」という行事を実施しました。これは、応援団の協力を得てブラスバンドやバトントワーリングの演技や講演会、実際にコンピュータをさわってもらって簡単な講習会などを実施して総合情報学部を知ってもらうための行事です。町の人たちにも屋台を出してもらったりしているのですが、今年あたりは学生の屋台も大変増えて、参加してくれる子ども連れの市民の方々が五千人ぐらいになりました。高槻市にも後援してもらい、市バスも出してもらっています。

もう一つは、これも初年度からの行事で、当初は夏休みにやったんですが、現在は九月から十月にかけての週末に「市民セミナー」という形で開いています。学部の先生方の講義やパソコン教室、インターネット教室なども実施しています。

企業や産業界との関係では、学部が発足する前に総合情報学部の開設ＰＲということで、「総合情報フォーラム」を十月と十二月に二度実施しました。学部発足後も十月と十二月にフォーラムを継続して開いて多数の企業関係者に出席していただいていますので、地道に続けていきたいと考えています。

十分とは言えないのですが、早くから地域や社会とのつながりを重視した活動を手がけたのも、よかったのではないかと思っています。

薗田　いろいろ新しい計画に基づいて新しい実験が試みられているようで、大変うらやましく拝聴いたしました。最後に石川先生から何かありましたらお願いします。

石川　一点だけ申し上げたいことがございます。こういう新学部の設立では、いずれの場合でも関係者に大変なご苦労がある。めでたく発足したわけですが、学部の竣工式があった時に私が最も感じたのは、新校地の開発に対して大変腐心され、心配しておられた久井理事長がいらっしゃらなかったということなんです。

校友会の新聞にも書かせてもらったんですが、あの学舎の後ろに横たわっている山の雲間に私は久井先生のお顔を見ました。笑っておられるような久井先生で、「これからしっかり頼みますよ」ということをおっしゃっているような感じがしました。

それと、新しい学部でこれほど全学的に祝福され、法人の総力をもって出発した学部はないんです。社会学部の時はもっといろいろな問題がありました。それで、法人が全力を尽くされて、経費的にも随分用意された学部ではありますが、新築家屋において初期故障が見つかるように、いろんな問題点もあります。それは予算の関係上、十分な教室が設定できなかった。研究施設も若干足らざるところがあった。あるいは学生の福利厚生施設が食堂も含めて大変不足している。そしてこれからの課題は、千里山キャンパスと高槻キャンパスの学生が、教職員も含めていかに融合していくかということにあろうかと思います。大学全体としてもっともっと考えて工夫をしてみたいと思います。

さらに、学部設立の理念――高木先生の言葉でいうと〝情報ジェネラリスト〟ですが、来年度からは総合情報学部に大学院が設置され、それの理念は、簡単に申しますと〝情報スペシャリスト〟の養成です。この二つの教育研究施設が設置されたならば、今までの不足等も含めてますます充実するでしょう。大学としても十分に応援したいと考えています。

薗田　大いに期待したいと思います。本日は大変面白い裏話も含めて貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。また、オブザーバーとしてご出席いただきました関係の方々には、事前の資料提供ほか、諸般のご協力を賜り、この点につきましても、厚く御礼申し上げます。

高槻キャンパスの開設に関する略年表

年月日	事項
昭和51年4月	入学定員の増員に伴い、校地面積が不足することになり、校地の取得が課題に
54年9月	文部省視学委員の指摘により、理事会が新校地候補地の折衝を開始（千里山キャンパスから通常の交通機関を利用して六十分以内の場所）
55年10月	理事会、高槻市霊仙寺地区と川西市猪名川地区の二候補地について鑑定評価を専門家に依頼
56年5月22日	理事会、高槻市霊仙寺地区の土地十一万坪購入を承認
57年11月17日	稲野治兵衛副理事長、学園建設委員会に第二キャンパスの具体的な利用計画の策定を口頭で諮問
58年6月29日	大西昭男学長、教学充実計画委員会に第二校地（仮称）の活用について諮問
58年11月8日	長砂實教学充実計画委員会委員長、大西昭男学長に新校地活用の基本方向として正課体育授業の充実、課外体育施設の充実、新学部の創設等の内容を含んだ答申「第二校地（仮称）の活用について」を提出

昭和59年3月9日	久井忠雄理事長、学園建設委員会に新キャンパスの利用計画を含む学園の総合的充実計画の策定を諮問
59年3月29日	理事会、高槻市霊仙寺地区の隣接地約二万坪購入を承認
59年6月20日	学園建設委員会内に「学園建設計画に関する懇談会」が発足。大西昭男学園建設委員会委員長、同懇談会に新校地の利用計画について諮問
60年6月27日	石川啓学園建設計画に関する懇談会座長、大西昭男学園建設委員会委員長に対し、時代に即応する新学部を設置する必要があるとの認識に基づく検討内容の答申「新校地（高槻市霊仙寺）の利用計画について」を提出
62年4月16日	高槻校地開発計画に関し、都市計画法第二十九条に基づく開発申請書を岸昌大阪府知事に提出
62年8月29日	岸昌大阪府知事から高槻校地開発申請に対する許可証交付
62年9月1日	理事会で岸昌大阪府知事から高槻校地開発申請に対する許可証交付の件を報告。土地代の支払い等につき意見交換
62年10月7日	学園建設計画委員会内に「高槻校地利用計画に関する懇談会」が発足。学園建設計画委員会委員長、同懇談会に高槻校地の利用計画について諮問

昭和63年4月30日	高槻校地造成工事起工式を挙行（造成開始）
平成元年11月22日	大橋昭一高槻校地利用計画に関する懇談会座長、大西昭男学園建設計画委員会委員長に高槻校地で新学部を設置することが望ましいとする答申「高槻校地での新学部設置について」を提出
2年1月25日	大西昭男学園建設委員会委員長、久井忠雄理事長に答申「新キャンパスの利用計画について」を提出
2年2月23日	理事会、学園建設委員会からの答申を検討。理事たる学長に新学部構想案の検討・調査を委嘱
2年3月23日	理事会、新学部設置を決定
2年7月13日	大西昭男学長、理事会で新学部構想案に関する検討・調査の進捗状況を報告
2年9月28日	大西昭男学長、理事会で新学部構想案に関する検討・調査の進捗状況を報告
2年10月11日	理事会、大西昭男学長に高槻校地における新学部構想について、平成6年4月開校をめどとした具体案の策定を諮問することを承認
2年10月15日	久井忠雄理事長、大西昭男学長に高槻校地における新学部構想について、平成6年4月開校をめどとした具体案の策定を諮問

平成2年10月17日	学部長会議、高槻校地における新学部構想を検討
2年11月7日	学部長会議、高槻校地における新学部構想を検討
2年11月28日	学部長会議（持回り）、高槻校地における新学部設置検討委員会の設置を了承
2年12月3日	高槻校地における新学部設置検討委員会開催
2年12月10日	高槻校地における新学部設置検討委員会開催
3年1月9日	大橋昭一高槻校地における新学部設置検討委員会委員長、大西昭男学長に答申「高槻校地における新学部設置について」を提出
3年1月16日	大西昭男学長、学部長会議で平成6年4月開設を目標に「総合情報学部（仮称）」を高槻校地に設置することを提案。各学部教授会での検討を依頼
3年1月25日	大西昭男学長、理事会で「高槻校地における新学部設置について」（答申）と「高槻校地における新学部設置について」（学長提案）を報告
3年3月25日	高槻校地造成工事竣工式を挙行（造成完了）

平成3年3月27日	大西昭男学長、学部長会議で「総合情報学部（仮称）設置準備委員会」の設置を提案。各学部教授会での検討を依頼
3年4月17日	学部長会議、「総合情報学部（仮称）設置準備委員会」の設置を了承
3年4月26日	理事会、「総合情報学部（仮称）設置準備委員会」の設置を了承
3年5月29日	第一回総合情報学部（仮称）設置準備委員会開催。(1)平成6年4月「総合情報学部（仮称）」開設目標、(2)入学定員四百名、(3)小委員会、①教務関係小委員会　②財務関係小委員会　③施設・設備関係小委員会
3年5月30日	総合情報学部（仮称）設置準備委員会の委員について理事会で報告
3年6月12日	総合情報学部（仮称）設置準備委員会教務関係小委員会（第一回）開催。カリキュラム等につき、三分野（人文・社会・自然）の分科会で検討することを了承
3年7月2日	関西大学一〇〇周年記念セミナーハウス・高岳館地鎮祭を挙行
3年7月20日	第二回総合情報学部（仮称）設置準備委員会開催。教務第四分科会（外国語、保健体育）を設置。財務関係小委員会と施設・設備関係小委員会が発足

平成3年9月10日	第四回教務関係小委員会で「カリキュラム専門委員会」の設置・発足を決定
3年10月2日	第三回総合情報学部（仮称）設置準備委員会開催。入学定員の変更（四百名から五百名へ）を決定
3年10月16日	第四回総合情報学部（仮称）設置準備委員会開催。委員長、大西昭男学長に「総合情報学部（仮称）大綱（案）」について（報告）を提出。大西学長、学部長会議で「総合情報学部（仮称）大綱（案）」について（報告）の検討を各学部教授会に依頼
3年10月23日	学長提案、各教授会へ「総合情報学部（仮称）大綱（案）」
3年10月	新学部設置準備プロジェクトチーム結成（事務組織）。申請業務に精通した文部省事務官との懇談
3年11月20日	学部長会議、「総合情報学部（仮称）大綱（案）」を了承。大西昭男学長、稲野治兵衛理事長に答申「高槻校地における新学部構想について」を提出
3年11月22日	理事会、答申「高槻校地における新学部構想について」を承認
3年12月6日	理事会、「総合情報学部（仮称）設置委員会」（委員長・理事長、副委員長・学長）と「総合情報学部（仮称）設置小委員会」（委員長・教学部長）の設置を承認

平成3年12月20日	第一回総合情報学部（仮称）設置委員会開催
3年12月	文部省大学設置事務室企画課事務官との事前相談開始（年間24～25回）
4年1月	文部省大学設置事務室私学行政課事務官との事前相談開始（年間24～25回）
4年2月19日	第二回総合情報学部（仮称）設置委員会開催。稲野治兵衛委員会委員長、稲野治兵衛理事長に「総合情報学部（仮称）設置計画の概要（案）について（報告）」を提出
4年2月28日	理事会、総合情報学部（仮称）設置の大綱を承認（継続審議）。（仮称）を取ることを了承
4年3月6日	理事会、総合情報学部の設置を承認。寄附行為の一部改正（社会学部社会学科の次に総合情報学部総合情報学科を追加）を承認
4年3月11日	稲野治兵衛理事長、大西昭男学長に「「総合情報学部」の設置について（通知）」を通知
4年3月30日	評議員会、「「総合情報学部」の設置に関する件」と、これに関連する「学校法人関西大学寄附行為の一部改正に関する件」を承認
4年4月1日	新学部設置事務室開設（事務長一、課員三）。総合情報学部機械・設備検討作業委員会を設置

平成4年4月8日	第一回総合情報学部人事委員会を開催（総合情報学部設置小委員会（教員パート）を名称変更）
4年4月10日	理事会、総合情報学部の入学定員の変更に関する件を承認
4年4月17日	関西大学一〇〇周年記念セミナーハウス・高岳館竣工式を挙行
4年4月20日	第三回総合情報学部教務委員会、設置委員会を開催
4年4月23日	文部省（企画課・私学行政課）へ第一次認可申請書類を提出
4年4月27日	第一次認可申請書類、文部省（企画課）で受理
4年4月28日	第一次認可申請書類、文部省（私学行政課）で受理
4年5月14日	文部省で大学設置関係に関わる設置構想審査委員会開催（5月21日、28日にも開催）
4年5月15日	文部省で寄附行為関係に関わる基本構想審査会開催（5月22日、29日にも開催）
4年6月2日	総合情報学部機械・設備検討作業委員会、「高槻キャンパスネットワーク／機械設備／備品　計画（案）」の結果報告

平成4年6月4日	文部省私学行政課より第一次書類の審査結果について連絡あり（特に付記すべき留意事項なし）
4年6月8日	文部省企画課より第一次書類の審査結果について連絡あり（特に付記すべき留意事項なし）
4年6月26日	総合情報学部の自己点検・評価に関する打合せ会開催
4年6月	大西昭男学長宛に「総合情報学部の開設に伴う既存学部からの専任教職員の移籍並びに兼担教育職員の依頼について」提出。学長は各学部長宛に割愛願いを提出
4年7月8日	第五回総合情報学部設置委員会開催。専任教員五十四名、学則・学位規程、機械・設備、7月末提出の追加書類につき大綱了承。理事会、第五回総合情報学部設置委員会で大綱了承された内容を承認
4年7月15日	大西昭男総合情報学部設置委員会委員長代行、大西昭男学長宛に既存学部からの兼担教育職員の依頼につき願い出文書を提出
4年7月30日	文部省（企画課・私学行政課）へ第一次申請追加書類を提出、受理
4年8月19日	文部省（私学行政課）へヒアリング（説明聴取）資料を提出
4年9月9日	文部省（企画課）へヒアリング（説明聴取）資料を提出

平成4年9月17日	総合情報学部設置小委員会、文部省の非公式指摘事項による「経済学関係の強化」のため、「経済システム論」と「経済政策論」の追加を決定
4年9月23日	総合情報学部設置委員会委員・総合情報学部就任予定教員（五十四名）で構成する第一回総合情報学部の懇談会並びに高槻校地見学会をセミナーハウス・高岳館で開催
4年9月24日	総合情報学部学舎棟等建築工事地鎮祭を挙行
4年10月9日	関西大学総合情報学部通信〔第一号〕発行
4年10月14日	文部省（私学行政課）のヒアリング（説明聴取）実施
4年10月21日	文部省（企画課）のヒアリング（説明聴取）実施
4年10月	専任予定教員の割愛依頼のため、所属大学等への交渉開始
4年11月9日	「私学行政課のヒアリングの際に指示された事項に対する回答文書」と「寄附行為変更認可申請の一部変更」を提出
4年11月13日	「私学行政課のヒアリングの際に指示された事項に対する回答文書」と「寄附行為変更認可申請の一部変更」を提出、受理

平成4年12月22日	文部省（企画課）より第一次審査通達のため、平成5年1月8日に文部省へ来省依頼の電話あり
5年1月8日	文部省私学行政課で文書の交付、企画課で通知文の交付
5年1月16日	英語教育検討会開始
5年1月19日	実習カリキュラム小委員会開始
5年2月17日	第六回総合情報学部教務委員会、教員人事とカリキュラムの一部変更を了承
5年2月26日	理事会、事務組織規程の一部改正を承認（企画室新学部設置事務室の廃止と高槻キャンパス事務局の新設）
5年2月	専任予定手塚教授の急逝に伴う教員を補充（新教授一、兼担教授三）。高槻キャンパス下宿懇談会開始
5年3月5日	理事会、総合情報学部の教員人事とカリキュラムの一部変更を了承
5年3月19日	総合情報学部教務委員会、設置委員長宛に「総合情報学部の助手の公募について」報告文書を提出
5年3月	「総合情報学部の助手の公募について」各大学院へ送付

平成5年4月1日	高槻キャンパス事務局開設（次長一、課長一、課員五、定時事務職員二）
5年4月10日	教務委員会
5年4月21日	第七回総合情報学部教務委員会、「総合情報学部開設準備委員会」の設置を了承
5年4月	文部省事前相談。高槻市バスとの交渉開始。高槻下宿経営者懇談会。短大・高専への編入学制度説明会開催
5年6月2日	第八回総合情報学部教務委員会・第七回同設置委員会、文部省へ提出する第二次申請書類の内容を了承
5年6月25日	理事会、文部省へ提出する「第二次申請書類」「第一次審査時の指示事項に対する回答」「前年度申請書の一部変更願い」を承認
5年6月28日	文部省私学行政課、「第二次申請書類」「第一次審査時の指示事項に対する回答」「前年度申請書の一部変更願い」を受理
5年6月30日	文部省企画課、「第二次申請書類」「前年度申請書の一部変更願い」を受理
5年6月	文部省事前相談

平成5年7月9日	理事会、総合情報学部学舎棟等の名称を承認
5年7月21日	総合情報学部人事委員会、助手一名を内定
5年7月	文部省事前相談
5年8月3日	文部省私学行政課へ「寄附行為変更認可申請に関する実地調査の事前資料」を提出
5年8月27日	文部省企画課へ実地調査の事前資料として「関西大学　総合情報学部設置認可申請書関係資料総括表」を提出
5年8月	文部省事前相談
5年9月6日	文部省私学行政課、高槻キャンパスセミナーハウス・高岳館で実地調査を実施
5年9月9日	文部省企画課で総合情報学部教員個人調査の結果、伝達（教員全員「可」）
5年9月16日	文部省企画課、高槻キャンパスセミナーハウス・高岳館で実地調査を実施
5年9月	文部省事前相談

平成5年10月14日	高槻キャンパス見学会（高校進路指導教諭）
5年10月	兼任教員集会。助手着任（三名のうち一名）。ＣＮＮ英語教材作成打合せ。文部省事前相談。総合情報フォーラム開催。新学部説明会開始（大手予備校対象）
5年11月1日	総合情報学部開設準備委員会委員に委嘱状を発令（任期は平成6年3月31日まで）。同時に開設準備委員会の副委員長を三名に増員。文部省企画課に「総合情報学部補正申請書」を提出
5年11月14日	第二回総合情報学部懇談会開催（専任予定教員に対し、経過や開設までの準備、学部運営体制、赴任・勤務関係等について説明）
5年11月26日	文部省企画課より補正申請に関わる教員審査が終了し、すべて「可」の判定となった旨、通達
5年12月10日	理事会、総合情報学部設置委員会委員の任期延長を承認
5年12月14日	一八時三〇分、文部省から認可の内報
5年12月21日	文部省で「総合情報学部設置に係る認可申請」の認可書交付
5年12月24日	総務課、評議員・顧問宛に「総合情報学部の設置認可についての報告」文書を送付

平成6年1月7日	第三回総合情報学部教授懇談会を開催。教務委員会、設置委員会をあわせて開催
6年1月14日	理事会で総合情報学部設置認可について報告。関大一高卒業見込み者入試
6年1月15日	一般推薦入試
6年1月	新学部仮教授会。新設大学説明会（大阪、新潟、東京）。情報関連機器据え付けとテスト開始
6年2月6日	S（地方）入試
6年2月15日	学舎棟完工引渡。事務局引っ越し
6年2月19日	社会人・留学生・帰国生徒入試（社会人十一名、留学生七十一名、帰国生徒十三名受験）
6年2月27日	A入試（一万五五八五名受験。S含む）
6年3月15日	総合情報学部学舎棟等建築工事竣工式を挙行
6年3月	新学部教員集会（一泊二日）
6年4月1日	新学部オープン